

特35

875

大日本教育會館

一	一	二
册	六	三
	四	函
	號	
	五	
	架	

佛  
教  
真  
訣  
略  
解

014561-000-2

特35-875

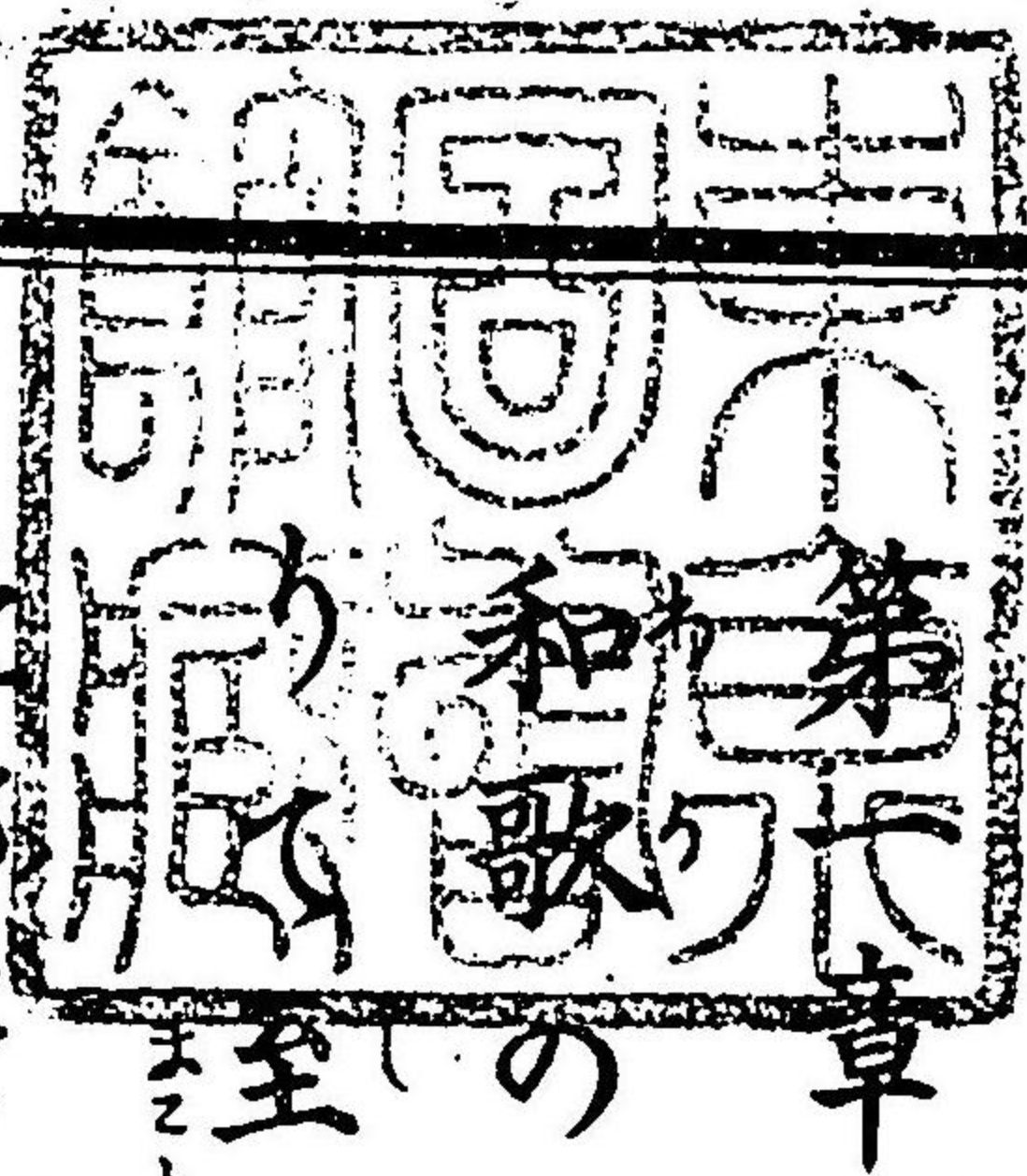
佛教真訣略解

平山 省齋/著

M20

ABB-0976





俳教真訣畧解

大成教管長平山省齋述

権輿神代諾冊二尊の言ことばよ起おこ  
と誠無造作を以て和歌の本體ほんたい

陰陽斯開二靈為群品之祖諾冊二尊奉ほう  
天神修理固成之命降造八尋殿于淤能おの

非教真訣畧解

明治二十年刻成

俳教真訣畧解

東京 大成教館藏

明治二十年五月五日内務省交付 第3576号

明治二十年刻成

俳教真訣畧解

東京 大成教館藏

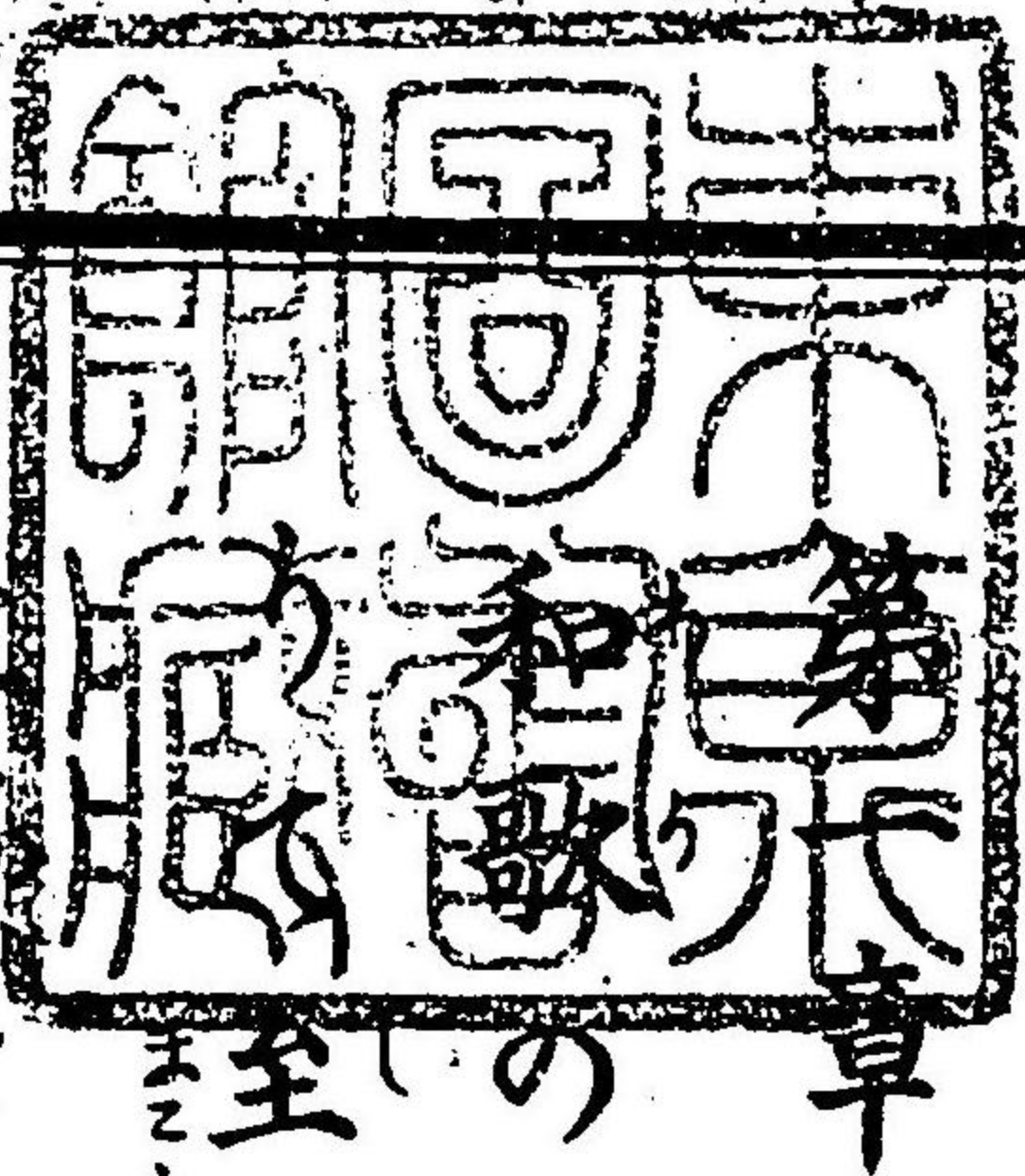
明治二十年五月五日内務省發行 3826

特35  
875

俳教真訣畧解



大成教管長平山省齋述



権輿神代諾冊二尊の言よ起  
誠無造作を以て和歌の本體  
とあるを以て

陰陽斯開二靈為群品之祖諾冊二尊奉  
天神修理固成之命降造八尋殿于淤能

俳教真訣畧解

碁呂島肇夫婦之禮

陰陽より群品之祖までハ太の安萬侶  
朝臣の古事記の上表の文よ志て此の  
上よ乾坤初分る參神造化の首を作と  
あるふ對して陰陽の氣斯よ開けて其  
陰陽二の神靈即ち諾冊二尊の力を合  
心を協ひて神人萬物を化成したまひ  
て天地萬物の大祖とあり賜ふを云爰

二尊天神の是多陀用幣流國を修理

固成この大命城受玉ひて天降まして

瓊茅の滴より自ら凝固たる於能碁呂

島よ八尋殿城造始て夫婦の禮を肇た

まふ時よ諾尊の曰くあふ喜志や美し

き少女城按志愛表登古事記よ阿那迹夜

那迹夜志愛表登古事記よ阿那迹夜

諾尊ハ夫淑美ある男子を烈婦を生得たと云玉宣

春の語るを聞て大よ感  
 冊尊應へてあ  
 る所ありきもあふべし  
 尊各其思ふまゝを言ふ出玉ふ  
 喜一や美一き徳義高き男子をと二  
 六れぞ神州歌謡の權輿  
 あり上古ハ質  
 樸そのまゝよ其心よ感  
 するまゝハ歌  
 出て言の長き短きも定  
 めず其意の想  
 ひ起る所よ始て情の盡  
 る所よ止まる  
 顧よ是の天眞の音調作  
 為の無き所が

歌の本つ體ありその後素盞鳴神の出  
 雲の國よ降玉玉ひて八頭蛇  
 成て共よ棲玉  
 奇稻田姫を聚り宮殿の成  
 て共よ棲玉  
 ふ時よ咏出玉ふ八雲たつ  
 出雲八重垣  
 妻籠尔八重垣造留其八重垣  
 乎と始て  
 五文字七字五字七字七字合  
 して三十  
 一字よして聲律備るよみ  
 なりし是上  
 文上古長短の定まらざるよ  
 應其よ

王仁名人の難波津尔咲也此花冬籠今  
 乎春邊止咲也此花又采女淺香山影佐  
 衣見由留山乃井乃淺久波君乎思念奈  
 久尔ふどの名高き歌とも、皆此の素  
 尊の八雲の神詠の聲律よ従ふ後世ま  
 で此範圍を出るらと無きハ皆天道の  
 發見する本體あればあり  
 夫花間啼鳥水面鳴蛙云云

紀貫之の古今の序を引て歌の皇國の  
 寶典あるを明に夫花の間よ啼諸鳥  
 水の面よ鳴く蛙の聲を聞けば天地の  
 間よ生ある者何者る歌をよまざる者  
 あらむや各それを以て天真の妙靈を鳴  
 出て毫るども作為するとあし而して真  
 實よして妄作あく念も無く想も無く  
 即六、の惟神の道あり一たび斯惟神

の真體を悟り得まば能天命の性と云  
毛即天津神の人々も界與玉ふ神魂天  
神と同一よて千年の古の神聖も皆同  
一まゝ後の世も神人聖人世も出賜ふ  
も亦皆同一あり惟も神人聖人同一あ  
るのこあらずして凡夫人民と雖ども  
亦皆同一あり之を推廣て大よまれば  
天地の造化の玄功を賛くべく之を小

よ用ふまば日用五倫父子君臣夫五常  
仁義禮智信我カ稱慈皆其道よ當り得  
之妙上よ用ふれば天下經綸政治を禪  
べく之を下よ用れば身も心も安く九  
族よ高祖より玄孫を和睦る顯世よ壽命  
長く健康よして兒孫蕃榮し幽世よハ  
天國の所謂日の雅宮よ登無上安樂の  
真福を得百の行萬の善事何事も足具

らざるをよし故に神武天皇以来列世  
 の天皇之を以身を修め家を齊へ國を  
 治め天下を平治し賜ふ實に我皇國の  
 至寶にすべき御訓の道也故に古より  
 禁中よ學問の外必歌を學ばせ賜ひし  
 あり  
 天道至誠之妙云云  
 此一段の天道至誠即和歌の本體彼の

儒佛よ説所自然合一あるを述ふ  
 天道至誠の妙流行して人及鳥獸虫豸  
 有足を虫と云ひの聲音よ現はる者  
 無足を豸と云ふの聲音よ現はる者  
 儒教よ所謂誠ハ天の道あり之を誠よ  
 するハ人の道あり至誠ハ勉すして道  
 よ中り思をして道を得る又一切萬物  
 皆我が身よ備る我が身よ反り求て至  
 誠の域よ至らば其樂これより大なる



正ハあらじといひ佛教も亦萬物も  
應じて更よ心を住する所無し而や  
り其心よ何事も生ずる者あり三界唯  
心造と云ふ同し是皆我國の和歌の一  
切萬物見るが随更よ思慮を用ひざし  
て真心の妙靈を現む者と毫毛も異な  
るるよし之を觀れば道よ東西の隔無  
きと哉會得たるよ餘あり

第二章

此章ハ歌の道後世よ至り盛み行し  
より遂よ上古の真を喪ひ連歌あり  
と雖も亦輕佻よ流れて真歌衰頽を  
救ふよ足らば是よ於て芭蕉翁慨然  
として正風俳諧の一派を開きし所  
以を述ふ

詠歌之道後世云云

和歌ハ人情の自然おのづからも出る者ものふして我  
が國の言辭ことばふれば後世のちのよ一向ひとすべしも盛さかる天  
下うも行札歌おこまきうたも名なある家々いへいへの名人めいじん輩たぐひ出  
して各華麗おのづからの文藻ぶんそうを競まをひ浮靡うぶの言句ことば  
を争あざむひ遂つひも我が家いへも秘傳ひでんありと甲こう云  
へバ乙おつも亦また我門わがもんも秘訣ひけつあり吾家わがいへ吾わが  
門もんも限かぎて輒たまたまく人ひとも示まさばと互たがひも誇たか合  
ひて囂がやぐ々さとして已やむ時ときふし終つひも和歌わがうたの

真理まことを喪うしなふ抑皇國おそくみくにの歌うたの多おほき二十一  
代集家々たいていあつゝの集あつを合あは幾萬部いくまんぶも至いたる上あ古  
の古事記書紀ふるきじきよき萬葉まんやうも在ある者ものも比ひまれ  
ハ幾陪いくばいの多おほきふ至いたて却かへて和歌わがうたの道みちハ  
日々ひび月々つきつきふ湮滅えんめつせり  
連歌者れんがしや雖肇なほ於諾冊よたくなふ二尊ふたつ之神詠のかみうた云云  
連歌ハ伊弉諾伊弉册いそだに二柱ふたしらの神詠のかみうたふ肇  
と雖いへどもその體裁ていさいを成あたるハ景行天皇けいかうてんの

皇子日本武尊の甲斐の國坂折の梨今山  
よあ行宮ふ坐て珥斐婆梨菟句伐鳴須  
擬氏伊久夜迦經奴留と咏し玉ひしふ  
從者應る者なし燈城上る翁ありて加  
ガ奈比氏ヒ夜爾波古々ニ奴加日爾波吐普  
加與と應マあラせしコそ連歌の始メあ  
キ後世ノふツり連歌俳諧と云フそのあり  
是ハ歌の會の餘興ふものしたるふく

其一二を言バ宗鑑の姿城見れハがき  
つまた松蔭や月ハ三五夜中納言の類  
ふり又守武の俳諧の連歌千句ふ飛梅  
やかろくしクも神の春ノの如き皆輕口  
戲言ふして後世の弊歌ト同し後醍醐  
帝の建武年中二條良基卿一條兼良卿  
冷泉為祐卿等深く憂ひ連歌新式ヲ著  
し良基卿爾斐婆梨の歌ヲ本つきく筑

波集を作り古も復さむとて天文年中  
山崎宗鑑と云者あり書を著し弥縫た  
れとも其弊救ひ難し然して音調野鄙  
格例繁縟して其真實の本體を喪ふて  
歌と同一く衰滅せり只我る桃青翁千  
載の後ふ生れ少して北邨季吟の門ふ  
入て連歌を學び其蘊奥を究て壯年ふ  
して皇國の歌道の衰頽を歎き慨然と

して俳諧の一派を開く千古卓絶の見  
識と云ふべし

第三章

桃翁俳門焔開くの功を述ぶ

歌也者天道至誠至不亦偉也哉云云  
歌と云ふハ天道の至誠の人間禽獸虫  
豸の自然の聲音よ發出る者よして所  
謂勉すして道よ中り思ハせして道を

得從容と力ぞして至誠の道よ中是即  
天と人と唯一ある妙境惟神の真の本  
體あり後世の語格音調を競ひ紛々様  
々よ言あして家々よ秘傳あり戸々よ  
口訣ありと云ら如き者よ非以桃青翁  
此流弊哉慨歎する所ありて天然真正  
の正風俳門の秘密の鍵を開て和歌の  
本來の道を俗談俚語の中よ寓せ只管

小後世の表面の皮相また虚飾の邊幅  
を修る弊を去りて天地自然の真誠の  
妙機を發明してより天下後世の人々  
よ此誠の道よ進之入の門庭を會得せ  
しむ其功勞亦偉大よあらすや

第四章

芭蕉翁の三十一言の和歌を釐正せ  
すして俳諧小從事志たる大功德を

述ぶ

蓋釐正三十一言至盛徳至矣  
 惟ふよ三十一文字の歌の道の頽敗た  
 る弊を釐正して古よ復もも特よ月卿  
 雲客は歴々僅の人よ止りて博く億兆  
 の人民よ施して斯道の廣大あるとを  
 知らしむる能もは是桃青翁の畢生は  
 力を盡し其躬を頭陀の境界よ墮して

斯俳門の一派を世の中よ宣揚し玉ふ  
 所以ふり是よ於て耕作する村叟肩き  
 商する賤しきその樵夫牛飼童よ至る  
 まて皆悉く俳門よ入りて其道の中よ  
 遊ふ事を得るよ至る嗚呼翁の盛ある  
 徳義至まりといふ盡し

第五章

此段ハ芭蕉翁大悟徹底殆聖域よ至

りし人なる事を證する為古池の一  
章を細述す

翁一生言々句々云云

翁一生の間言々句々皆天真活潑の  
妙小非ざるいあし其中ふも古池の一  
章最人口ふ繪炙して誰知ざるものも  
あし故ふ大の章を擧て爰ふ示し其他  
の句も皆玄妙靈通あらざる無き事を

類を以推して知る魚し

一日翁訪僧至蕉門俳道為一教也

一日翁禪僧を訪ふ僧問曰く吾が釋門

の應無所住而生其心何等の解説を為

まべきや翁聲ふ應して古池や蛙飛ぶ

む水の音と唱ふ僧拍手讚歎して首肯

以一醫生望ふ在る曰く予其意を解せ

以詳細示し玉へ翁曰く然らば試み

俚歌を以て之を解むと云て世の中ハ  
障子の引手峰の松燧袋小鶯の聲と唱  
ひ玉ひしき其意ハ世の中とハさるる  
の衆人を云障子の引手といふ意ハ春  
分清明温暖の氣室に満障子を開て清  
き風を邀ひ入らんと思ふ時ハ芭蕉翁  
ハ已亡ありて障子をるる主とある戸  
を開けバ向ふよ見ゆる峯の上青松限

りある景色あり時よ嶺の松主とあり  
て障子ふし満坐の清風嶺の松風心よ  
るあひしまゝ煙草を喫せむ事を思ふ  
時よ嶺の松ハ已よ消て煙を喫る事主  
とある燧袋を以て煙草を聞せたるハ  
妙巧といふ處し其時鶯子聲うるちし  
く囀るさま如何ふも快し即鶯聲主と  
ありて燧袋も亦亡し其間髪の毛を容



るの透間もななく主とある者四たび變  
 りて芭蕉の執著の念更ふし人の壽  
 命百年一年三百六十餘日生涯六万六  
 千餘日年々歳々時々刻々變化りぎ  
 ふくして一息も已む時ふく而も芭蕉  
 翁の心何處よも住著する處ふく眼ふ  
 觸れ耳ふ感する者皆主とあり一切世  
 間喜怒哀樂愛惡慾種々の境場所因縁

千緒萬端憧々と絶へ以往來して炯然  
 とあきららるる鏡の中よ現出る來ま  
 照し去れば本来の空虚靈明一物も無  
 し故此の明鏡の中一物も無れとも物  
 來まハ現れ物去まハ即舊よ依り本の  
 如く虚靈不味あり是を天神界與此神  
 魂といふ儒ふ之を天命の性又ハ上帝  
 の表を降といひ佛よ真如實相といひ

いひ佛性と云ひ本来の面目といふ所  
 謂一切萬縁よ應じて住著する處無く  
 して其心よ生をれども其心よハ起滅  
 ふし即本来空ふして無心の佛性あり  
 古池の章ふて言へハ古池ハ本来固有  
 の性ふれハ古池と稱へる明鏡ふ比し  
 蛙兒明鏡の中ふ顯きて飛込む水の音  
 無心の蛙兒が無心の水よ飛込音の清

かくき言をるるは時よ蛙兒のそふ  
 あらば凡べく雪月花鳥一切天地の間  
 よ形あるそのまな如是洞然とあきら  
 らふらざるなくして而も少一の痕も  
 とく免ず古人の歌よ池の面よ夜ふく  
 月を通へども心もと免は影も能こそ  
 ず又照とも月も思をすうつまとも水  
 も思をぬ猿澤の池輾轉来るまの皆照

亦復如是儒小之在道心といひ佛小  
之在佛心と云即ち我の神魂天人唯一  
の主人公即我一身の君主あり四支手  
足百體勝胃諸臟即皆臣僕あり召仕あ  
り仮初ふも臣僕各其職務を奉じと君  
主の命ふ従へば所謂道心常ふ一身の  
主とありと人心每常主の命を一々聽  
く従へハ大聖人大賢人あり若妄念が

主とありと神魂(道心)之の臣僕とあり  
妄念よ駈役せらるるときハ小人とあ  
り凡夫とある諸教の旨皆神魂ハ主あ  
り妄心ハ臣あり君ハ君の位臣ハ臣の  
分限を正から志めむとある外あらに  
芭蕉翁夙く此よ自得する所ありて大  
悟徹底する旨切適此一句よ言出せる  
あり是芭蕉翁の家門の俳道ハ一死教

とある所以あり

按獅子菴蓮二至為不朽龜鑑云云  
按むるふ獅子菴蓮二翁著す所の白馬  
經ふ正門一道建立之意と題して曰く  
今日ハ昨日の如く昨日ハ今日の如し千  
萬年も如是是目前端的自然の本體ふ  
り桃青の名字を打破して方始く正門  
ふ入る古池や蛙飛ぶむ水の音此一句

ハ芭蕉翁が佛氏の所謂正法眼藏涅槃  
妙心を悟得て之を十七字に發せり而  
して此小序ハ世に傳らる余曩に翁の  
親書を請く我る獅子菴の門に傳る萬  
代不朽の龜鑑と云云とあり  
東花坊支考至併備後賢之查考  
東花坊支考著以所の葛乃松原書も  
亦詳ふ此の事を論せり曰く翁古池や

の句を得玉ひく蛙云々の上五文字を  
想當に晉子其角側は在く山吹やとあ  
りてハ如何と申せしハ翁遂は古池や  
の五文字を得たり其音調高邁ふして  
意旨悠遠あり蓋傳ふる所異同あまど  
も皆翁の道を悟得し句ありとせる事  
ハ同一あり併舉る後の賢者の查考は  
備ふ

第六章

芭蕉翁艱關辛苦し十大弟子を得  
て後世ハ其道統を垂るる大功を論  
ず

天真之歌者至千辛萬苦之血痕也

天然の真歌ハ只一の誠而已是より外

よある事あり延暦桓武帝延暦十三年

國遷一平安城と云ふ是よ奈良の朝と和

年中より已降その理を知る者ありし  
 千載の下獨り芭蕉翁活眼を開く神代  
 の昔の真の歌道よ遡り中古の舊習を  
 脱落しく真歌の道を傳へ始て人々安  
 心立命の地位を知る是より天下の其  
 正門を得ざる者をして斯道よ入し免  
 んと志して自緑髪を薙棄る名聞利養  
 を離れ官を棄る富貴功名の念を斷頭

陀僧形廻國行脚を學び風箏烟笠の旅  
 姿山河の險阻城跋渉し湖海を航り百  
 方其道を傳ふべき人城討歩行き關艱  
 を極く漸く高足弟子十人を得たり  
 十哲の第一寶井其角ハ竹下東順醫師  
 孔子幼名源助儒城寬齋よ學び醫城草  
 川某詩を大巔禪師書ハ佐々木玄龍畫  
 を英一蝶よ學びく其妙城究め後蕉門

不入く尤高足たり晋子其角ハ易ノ晋  
ノ卦よ取る寶晉齋々米元章ノ硯よ題  
せし字なり一號螺舎晋子又雷柱子涉  
川畫名ハ薯子と云狂雷堂狂而堂六病  
菴善哉菴文合菴等の號あり性放逸高  
邁人事小拘ら冷常酒城嗜んで其醒た  
る城見る事おし一日詩文の會筵よ行  
く人々苦吟の中ふ其角醉卧し仰ぎ居

忽ち一妙句を得たりと起あがりて曰  
く仰見銀河底と又冠里公の會よ公の  
曰く金柑有と銀柑ふきハ如何と戲ま  
玉へハ答と金玉有て銀玉無り如しと  
其敏才大抵如是後茅場町へ草菴城結  
びし近隣ふ祖徠翁の家あまふは梅  
の香やとふ里ハ荻生莊右衛門寶永四  
年二月春煖坐門爐の吟ととく鶯の曉寒

しきましく以て為して病臥し少りよ  
 七日ふいて歿す此句一生の終吟と  
 成るなり又聲るまゝ猿の齒白し峯乃  
 月人或ハ評して曰く若此子を以て詩  
 よ從事せしめを何ぞ李王と沈宋とよ  
 減せむや花盛り子て歩行る、夫婦  
 如名月や疊のうへへ松の影冬来てハ  
 驚鹿よとはる鴉り也其縦横自在見  
 る

べし抑俳諧の蕉翁と此子とよ於ち  
 や一朝論盡可ハ非ず後人或ハ云晋子  
 能調師翁よ異ふりと其離く合者ある  
 を知らざるあり支考許六の輩議論煩  
 苛其作思を焦し奇を索むるも蕉翁の  
 條暢晋子の放縱よ及ちざる事遠し  
 第二服部嵐雪ハ淡州小榎並村の人幼  
 名久馬助長しく彦兵衛ト改東都よ出



新庄しんじょう隱州いんしゅう公こうよ仕つかへ故ゆゑありそ井上いのうえ相州さうしゅう  
 公こうよも奉仕ほうしせり一年いちねん君侯きんこうの供ともして我わが  
 第たいよ歸かへる井いの端はたよ倚よりて足あし濯そくんこを  
 小卒せうそくよ空そらりき曇くもり霰あられ降ふり来きるを見みて  
 武ぶ士しの足あして米こめとぐ霰あられの如ごとく戯たむれ口くち  
 ぞさみしる素もとより菊きくを東籬とうりの下もとよ採とり  
 山色さんしきを樂たのまんこを志こころ止やむとく幾いく  
 なふし仕つかを辭いへ帯た劔けん衣い類るい雜ざ器きよ至いたる

まて一塵いちじんも携たづへす其儘そのままにこし置お唯ただ一いつ  
 身みを行い雲うんと共ともよ立た出でくいつしる蕉門せうもん  
 よ遊あそぶ俳名はいなを治助ちすけと云い後嵐のちの嵐雪ゆきと改あらし  
 ハ嵐のちの嵐の庭にわの雪ゆきあらでハと思おもひ寄よとの  
 愚おろさ今更いま改あらんもたこるましと笑わらふ事こと  
 度たびくあり妻つまの名なを烈はげといへるも嵐のちの嵐雪ゆき  
 能た切きあり初はじめ黄落おうらく菴あん寒蓼さむらひ堂どうの稱なづあり  
 後のちよ雪ゆき中菴ちゅうあん一いつよ不ふ白はく軒けん玄峯げんぼう堂どうと號なづす

六ハ禪錄雪埋千山什麼孤峯不白ある  
 といふ語ふよれるとぞ常よ濟雲方丈へ  
 參す關西行脚より歸く方丈よ謁す師  
 問く云く去春臨別送乞片語今秋歸來  
 相見了也即今如何是行脚眼と答て云  
 く觀音境裡古松樹師云く松無古今色  
 作麼生無古今色的一句雪進て云く春  
 色無高下花枝自短長師領く休去と雪

拜して退き去一とせ重陽の詠は(黄菊  
 白菊そけ外の名ハあくもがふ)晋子深  
 く感トて我生涯菊の句是よ及むびと  
 其と里人く菊の句をおふ者あれバ師  
 の白菊や此詠と此句とり外ら認ざり  
 一とふり其秀詠老成師翁の集中み置  
 とも亦何ぞ分んや(元日や晴て雀の物  
 ぐとり)不言祝賀還在其中蒲團着て寐

たる姿や東山(ひがしやま)譬喻(ひやうよ)の句難(くまな)し此(この)什(じ)温厚(おんこう)  
 和平(へいへい)實(じつ)は平安(へいあん)の景(けい)あるる(な)世(せ)話(わ)しあ  
 き身(み)の瘦(やせ)よんり作り獨活(どくかく)竹(たけ)の子(こ)や兒(こ)  
 の齒(は)ぐたの美(うつく)しき梅(うめ)一(いち)里(り)一(いち)輪(りん)程(ほど)の  
 暖(ぬる)りき澤瀉(ざさ)のふとり過(す)たる暑(あつ)く初(はつ)  
 秋(あき)の古(ふる)く後(ご)動(うご)きぬ繩(なは)すぶま(ま)皆(みな)以(も)て足(たり)  
 見(み)正(ただ)風(かぜ)之(の)真(ま)晚(おそ)年(ねん)山(やま)伏(ふ)井(い)戸(ど)は宅(たく)をト(と)く  
 久(ひさ)く住(ぢ)せり寶(たから)永(えい)四(し)年(ねん)十(じ)月(げつ)歿(ごつ)ま歳(とし)五(ご)十(じゅう)

四(し)辭(じ)世(せ)一(いち)葉(えつ)ちる咄(うた)一(いち)葉(えつ)ちる風(かぜ)の土(つち)常(つね)  
 用(もち)ひし一(いち)點(てん)印(いん)ハ門(かど)人(ひと)周(しゅう)竹(たけ)は授(ま)け周(しゅう)竹(たけ)  
 是(こゝろ)を吏(し)登(のぼ)る傳(つた)ふ後(ご)世(せ)この下(した)風(かぜ)お浴(あ)は  
 るもの東(とう)都(と)お多(おほ)し  
 第三(だいさん)支(し)考(こう)々(々々)美(み)濃(の)の人(ひと)始(はじめ)免(めん)禪(ぜん)門(もん)お入(い)り  
 鎮(ちん)藏(ざう)主(しゅ)といひしハ弱(じやく)冠(かん)の比(ひ)お吹(ふ)毛(もう)  
 劔(けん)也(や)春(はる)三(さん)月(げつ)斷(た)腸(ぢやう)牡(ぶ)丹(たん)花(か)下(した)風(かぜ)といへる  
 偈(げ)を作(つく)て宗(そう)門(もん)の高(たか)僧(そう)は稱(しょう)賛(さん)せらる東(とう)

非改真決界詳

都一寺の大會は碧巖の講師へ八條の  
荆棘哉難問す故に衆僧其才を妒み遂  
に禪機を挫ぎ至勢州山田に潛居以時  
小涼菟それ才を惜み俳諧を勸て蕉門  
よ入しむ學成て歸郷に坊號を東華西  
華と唱るハ四方は逍遙するの謂あり  
野は在ときハ盤子と呼び家は在とた  
ハ獅子老人といふ支考といへるは舊

名あり其學二教は涉り常は著を所十  
論古今抄等はと確論あり其發句小至  
りてハ許六と難兄弟あり至片枝ハ脈や  
かよひて梅の花灌佛や日出度事ハ寺  
はる至牛呵る聲は鳴たつ夕の影は  
め僧形を替へば僧律を守りて居ると  
しつ既にして衣鉢を解の心起る時  
蓮の葉ハ小便をれば御舍利ハ中比

肉食も放なみせしるらバ或ある法師はしやう諫いさめて曰いく  
若も墮お落らせば來ら世せいハ必かならず牛うしみあるべし  
と答こたて牛うしはある合あ點てんぢや朝あ寐ね夕ゆふも  
み一年いっねん尾びの巴え靜せいと伊い勢せへ遊あそぶとて桑さ  
名なの渡わたし舟ふねは乘のる比ひしと春はるの半はん遠とん山やま  
といまど額ひたい白しろく野の間まの内うち海うみハ董とう靴くつ草くさ  
よ色いろどり雲ひでり雀すずりの聲こゑ遙とほく聞きえて蒼蒼くた  
る海うみ上うへも鏡かがみの如ごとく繪ゑも及およぬ風かぜ景けいあり

靜この此こ子の脊せ中ちゆう我わ叩たたいて一いっ句くありやと  
問とふよ答こたて曰い古こ人じんも景けいは逢あてハ啞あむ  
るといへり斯かく十じゅう分ぶんある處ところはてを句く按あ  
の發はせむる物ものはあらび今夜こよひ何なん方ほうありと  
も宿やどりたる時ときそこは巨こ燧たいは詠えいむべし  
と實じつは道みちを得えたる人ひとありと靜せいも感かんず  
て人ひとに語かたしとぞ晚ばん年ねん故こ園えんは歸かへりて天てん  
年ねんを終まる時ときは當あて其その風かぜを慕慕ふ者もの多おほく

後世連綿として美濃の一派を唱はる  
まこと此老の徳といふべし

第四森川許六は江州彦根の藩士一名

百仲字羽官はと菊阿佛と自稱す居を

五老井と號に五老井四絶あり一は草

字藤程巴記二は楊揮豆毛絨賦三に雲

花園あり村銘四は紫芝園賛詩あり自其風雅

の媒たる事李由ら文は知らる人とな

り敏達よりて文字は長ト兼て畫を善

に畫を蕉翁も取て師とあし俳諧を教

て弟子とあしと書り其發句意表の興

味あり本箱は成べき桐の若芽の形今

日限の春の行衛や帆のけ船看經の間

を朝顔の盛り哉欄干は登るや菊の影

法師初霜や治る江戸の人心嫁入乃門

も過り鉢ふくた師翁没後そは遺愛

の櫻樹を伐て肖像を刻み是を大津の  
智月尼小贈る其文よ曰く

御床敷節せり於去御無事のとり目  
出度存候拙者事いまたすたし無御  
座候像も及延引候此度翁も手よぬ  
れらま候五老井比古木よて刻みま  
ひらせ候兼て大ふる像刻し度望御  
ぎ候へとも病氣よて叶がとく條猶

又得御意申候不備

十月三日 霜の後像よ添ふ菊もあ

許六

智月尼様

其恩遇の深を忘さざる事斯の如く惜  
ひのふ晩年癩瘡よ罹りて人よ面を  
事あし適道を問んと尋ね来る人あま  
ども屏風を隔る語を通び一年金城の  
萬子尋來て對面を請ふいので屏風を

隔へんやと病床びやうどよ入いて酒酌しゆしやくのよはよ唇くちびるが  
け落おちて臭氣きうき甚まし萬子まんにし近ちかく寄よりて昔むかしの如ごとく  
語かたり合あひけり正徳しやうとく五年ごねんよ死しに終まるる馬まの  
偈げふ一時いつじ打ぶ破は屎し糞ふん壺か芬ふん臭氣きうき供ま梵ぼん天てん  
下くだ手てむかり死しぬる事ことぞと思おもひし上あ上う  
手ても死しねむ屎し上手かみうなり此こ子こ終ま身み才さいよ  
誇こり他たを視みふ菊きく狗くの如ごとく故ゆに平生へいぜい翁おきな  
の腹はら中ちゆうへ下くだ駄たをきて入いるものハ我わがの

こなりと誇こまり斯か老らう後ごまで膚かわ撓たがまじ  
目め逃すがさるは俳家はいかの一ひと奇物きぶつといふ也

第五向井去來通稱平次郎肥前ひぜんの人ひと幼わかき  
より兄あにふ従したがひて京師きやうしに居をる夙むかしふ蕉門せうもんよ  
入いり俳名はいめいを去來きやうらいと稱あり其その風ふう格かく雪ゆき中ちゆう庵あん  
と並ならび其その先せんを争あふべし當時たうじ關かん以い西さいの  
渠みち魁けいあり芳野山ほうのやまはと散ちのよみ花はな免まぐ



王(動)くととも見えて畑りつ男(り)を(玉)棚  
 奥(あ)つ(の)ーや親(お)の顔(か)尾(び)頭(か)の心(こ)元(もと)は  
 き海(う)鼠(ね)ら(の)荒(あ)磯(い)や走(は)り馴(な)る友(とも)千(ち)島(じま)  
 師(し)翁(う)死(し)して後(のち)抄(しょう)を(作)て以(も)其(その)派(は)は便(べん)を  
 天(てん)性(せい)の深(こ)切(せつ)ある世(よ)の知(し)る所(ところ)あり其(その)舎(や)  
 を落(お)梯(は)と名(な)く自(みづか)記(き)風(かぜ)俗(ぞく)文(ぶん)選(せん)其(その)舎(や)不(ふ)壁(かき)  
 書(か)して曰(い)く  
 一(い)我(わ)が家(か)の俳(はい)諧(かい)に遊(あそ)ぶべし世(よ)の理(り)窟(くつ)を

いふべ(の)ら(び)  
 一(い)朝(あ)夕(ゆ)らとく精(しやう)進(じん)を思(おも)ふべし魚(ぎよ)鳥(とり)を忌(い)む  
 一(い)速(すみ)よ灰(はい)吹(ふ)きをま(つ)つべし烟(えん)草(そう)を嫌(きら)ふよは  
 一(い)隣(りん)の居(い)膳(ぜん)を待(まち)べし火(ひ)の用(よう)心(しん)よハ(あ)ら  
 一(い)と風(かぜ)流(り)よして可(か)笑(わら)し支(し)考(こう)り笑(わら)日記(に)記(き)

よ云去來よ烟管を掃除する癖何里又  
此をのちに隣の居膳といふ事あり是  
その屋敷守は與平といへる者朝夕の  
食事を送りたる故ありと時よ寶永元年  
九月死に彦根の許六その諫を作りて  
曰く上畧若かりし時より洛よ居弓矢  
を捨て十五年と吟トたるハ十五年先  
のよと合て三十年來の大隠士略何の

頃とりり先師蕉翁よ見て風雅の名ふ  
高ぶり京師よかまへて諸子の頭よ坐  
以南西の氣を押し東北の風を護り略  
荒野の時正風體の眼を開き湖の水ま  
はり々五月雨とらや猿蓑は撰を蒙  
く不易流行の巻を分ち後猿の新風ふ  
臨んでも終よ幽玄の細みを忘さし木  
枯の地よも落さぬ時雨のぬ子規鳴や

雲雀の十文字(宇)と申す里又何れの仲  
秋(や)岩端(や)爰(よ)も獨月の(客)と詠(ト)  
て先師を驚(り)一(月)賞(翫)の第一(古今)の  
秀逸(よ)は極(り)たり都(て)一代(の)秀逸(ハ)  
一(兩)句(持)る人(さ)つ稀(ふる)に此(子)ハ既(ハ)  
よ數(句)ふ及(べ)り二十餘(年)薪(水)の功(つ)  
もり嵯峨(の)落(梯)舎(よ)師(を)迎(へ)石(山)の  
幻(住)庵(よ)老(を)訪(ふ)心(ざ)一(深)く一(歳)難(ハ)

波(ハ)の變(を)聞(く)速(よ)纜(を)解(き)義(仲)寺(の)  
葬(よ)も肩(衣)ふ鋤(鋤)を携(ふ)死(後)の城(を)  
堅(く)守(り)諸(生)をな(つ)け初(心)を扶(く)越(る)  
の浪(花)ふ代(り)て有(磯)砥(波)の書(を)選(く)  
崎(の)卵(七)を助(て)渡(鳥)を集(む)此(秋)我(大)  
願(ふ)力(を)よ(せ)て文(選)序(者)の一人(よ)進(む)  
み病(床)よ卧(て)も三(度)自(他)の書(を)寄(と)  
るよ何(あ)る蕉(門)滅(亡)の月(日)よや(何)り

々ん去年の冬の中越の院家薨ト玉ひ  
ぬ今年衣更着丈草卒と秋九月この郎  
去て手もぎ足もたの思ひをけせて人  
の腸を断せたるぞや下略又支考う落  
梯先生の挽歌何里  
第六僧丈草を其先代く尾州犬山の重  
臣より幼より學を好て倭漢を究む躬  
みづから繼母よ事て孝あり弟ハ其生

る所なれば家をゆづりて其意を慰む  
嘗て左の指よ疵つけ刀の柄握り難し  
と偽り壯年武を辭して禪を學ぶ其時  
の口號多年負屋一蝸牛化做蛄蚰得自  
由火宅最惶涎沫盡偶尋法雨入林丘句  
又涼風よきゆる残雲の宿の如常つね法  
華經を讀誦するより他事ありといふ  
何の頃とりか蕉門よ遊んで時ハ興を

催ふと我事と泥鱒は逃は根芹う那啄  
木や枯木を探は花の中(聖靈も出て仮  
の世の旅寐りあ有明は振向がたき寒  
うな(着て立て夜の衾もなかり々(里隨  
意自在歎唱は堪へび寶永元年二月四  
十二歳ふして此世を去る友人去來誅  
を作て曰く今茲如月末は四日月ハ州  
庵は残る物あら禪師身はありぬと湖

南の正秀が許と里知はまなる小胸ふ  
さがり泪止えう祐ぬほくぐと此人の  
むかへ我思ふは尾張の國ふ生ま犬山  
侯は仕へて勇士は名も有とあや一  
日若黨一人を供して竊ふ君父の家を  
忍び出道の傍ふ髪たきり墨染は引  
替られ々ふ中略洛の史邦はゆ々り五  
雨亭に仮寐し先師は見へ初らましよ

り二疊の蚊帳の中に頭をねー並べ四  
間の火燧の上よ面をけー向て吟會れ  
ほくハ此人を缺以先師の言ふ此僧是  
道よ進み學む人の上よ立ん事月を  
越べからべとけたおへり其下地の艶  
しき事羨むべー然ども性苦み學ぶ事  
を好まび感ありて吟道人阿まて語に  
常々此事打忘とる可如し先師深川へ

歸里玉ふ比古の邊の句とも書集めゆ  
るられ々るうち大原や蝶の出てほふ朧  
月をといへる句二三入侍りし風雅  
の奥に上達さる古と我評し此僧をつ  
かーといつとを我りさへの傳へあり  
又難波の病床側よ侍ふ者どもに伽の  
發句をひゝ免今日と里我死後け句あ  
るべー一字の相談を加ふ處からんと

のたまひ々れば或ハ吹飯より鶴を招  
んと折ららの景物よりけて壽を述べ  
或ハ叱まて次の間み出ると便あき思  
ひよあゆれ又ハ病人の餘りすゝるや  
むつおどき限り我盡しけるが其ぬ  
ぐも等閑よ見やり唯うづくまふ薬罐  
の下の寒の形といつる一句のみぞ丈  
草出来とりとは感ド玉ひける實よ斯

る折よかゝふ誠こそ動のめ興を探り  
作を求るの暇あらトトハ其時よこそ  
思ひ知られ々れ先師遷化の後は膳所  
松本誰彼尊みたまひて義仲寺のりへ  
の山よ草庵を結び々れば時々門自啓  
曲く水相逢など打吟し或ハ杖を横  
落梯舎を叩いて飛こんど儘う都の杜  
鶴とも驚りさまま子も彼山よをひ登り

て脚下琵琶湖水指頭華洛山と眺望を共  
 よし侍りし城此人を山を下らざるは  
 誓あり予ハ世またバよふの役ありて  
 久く逢坂の關去る道も知らば去く  
 年の神無月一夜の閑を偷み草庵は宿  
 りて寒き夜や思つくまば山のうへと  
 申て今宵の芳話よよ後づ我忘たりと  
 其悦も斜ふらず更行まゝに雷鳴地よ

ひゞき吹風扉をはちけまば虚室欲  
 夸閑是寶満山雷雨震寒更と興出ら  
 れ笑ひ明して別まぬ身の上を鳴から  
 ばうなと聞えし雪氣の空も再び行免  
 ぐり今むおしき名はみ残りたる凡十  
 年の笑ハ三年の恨は化し其恨を百年  
 の悲を生む惜ても猶名ごりをしく此  
 一句を手向て來方行末を語り侍るは



こ(おき名たぐ春や三年の生あられ)と  
あり

第七野坡と越前ハ商家なりをいめ江  
戸は遊び後浪華に住む樗木社と號と  
蕉門の徒は附合の體を備ふるは此人  
と越人ふ超ふる者なりとふぞ發句ま  
と妙あり(子規顔の出されぬ格子の形)  
長松が親の名て來ふ御慶うを(はき掃

除いてから山茶散まると(此比の垣の  
ゆひ色や初志ぐれ)或夜盜賊その家  
忍入たり坡相對して云く我一物の貯  
ふ一唯茶一斤と、おつ置り今夜寒々  
れば柴折焚て快く寛話とべりと盜賊  
うおづきおがら彼此うち詠つ、机上  
は草庵の急火を逃し出ると端書して  
我庵の櫻も寂し煙り先とあるを見つ

け何の火事よやと問ふ坡爾このよ  
 答ふ左あらば今目前の有様と句作あ  
 るべきや坡よあはち垣潛る雀あらな  
 く雪の跡と賊大よ感て出ゆきけり  
 其人とあり放ふる事此の如し老後先  
 師の無名庵を高津野よ移し自ら高津  
 野の翁と稱せり其年壽詳あらば  
 第八越智越人の尾州名古屋よ住は蕉

門の老弟あり見歸まば白うべい屋  
 夕がらみ花あぶら植替らる牡丹の  
 形稗の穂の馬逃したる氣色のあ一年  
 江戸よて其角う句兄弟といふ書を著  
 して越人う送別の句よ散る時の心や  
 まさよ嬰粟の花といへはに散る時ハ  
 風も頼まばけいの花と其角も及むざ  
 るよし師翁も是を歎せらる曩よ師の

行脚は供侍る約あり何うの發  
心の志も覺とりや若き女あど出入  
せし事も有し我翁その終あらざる事  
を憐で後の行脚は其亭に寄玉をば  
何となく疎く成行し我後悔して羨ま  
し思ひ切る時猫の戀とはかちけり  
師も其慚愧をやとみらん後の撰集  
よ此句を加ふありとぞ翁歿して後

美濃の支考先師の夢想滑稽の傳おど  
と妄言を構へ其他杜撰の書多く出  
て古式を廢し世人を欺けるとして大よ  
怒り不猫蛇といふ書を著して詳ふ其  
非を辨せり實は我道は深切なる清潔  
の士とは此叟の事なるべし  
第九北枝ハ金城の磨工ふして牧童ガ  
弟あり蕉翁その誅才を感じて北方の

逸士と稱し夕風は何吹あげて朧月來  
る秋々風ぞありでもあかりに里竹賣  
て酒は替ぞや露時雨そは作去嵐の室  
よも入る初め其友如柳軒をあらべ  
て酒を鬻く枝素とり嗜む故は日毎  
行て阮藉ら爐邊よ葡萄の風流を盡し  
たり日と夜この事柳もはここの倦る  
る氣色なれば此比絶て言寄るべき方

便もなり中夏の比なりなるが枝訊て  
その下女は糠味噌やあると尋はふ  
下女も酒の事あらんと合點して是あ  
しと答ふ枝いそく是あく一杯はむ  
べしと柳腹をかゝつて大笑し終は酒  
杯を許し歩るとあま其時枝り口號夏  
酒や我と乗あむ火の車或夜枝り家  
俳諧あり三更の比偷兒入たり知る人

有て斯と告ぐ枝打笑て煤掃よを出べ  
 一と戯いふて居とり故ふ諸人よふ静  
 よして其席を崩さび時よ(世間吐)に  
 茶のほちんくといふ前句出とり枝取  
 あはず(盗人の目)又掛らるゝめでたさ  
 よと附とり元録年間金城舞馬の災あ  
 りて房舎半の曠野とある枝が家も延  
 焼よ逢ふ友人多く訪來る答へよ(焼)お

々里はまどとも花を散澄しとて自若た  
 りされど此叟飛鳥河の常おきを悟得  
 たる韻士ありと時人感トけるとぞ後  
 再び火災よあへるよ從吾人先よ來り  
 むの一は志氣いのバとて諸とも硯  
 も筆もまみと成る烟の中よ一句作麼  
 生枝おとつて(諸とも)小硯も筆もすみ  
 となり(其お)とけ葉残るく物そなき斯

る變ひんよも滑稽ちやくハ忘わすざりき此この時ときよ家見けみ  
舞まといふ集あひ出來で其中そのうち小こ燒やけふ々らりはま  
ども櫻さくらさかぬうち支し考こう梅うめが香かやまつ  
一番いっばんよ燒見やけみ舞ま牧童まかどうぐひにも笠かさ着きて  
登のぼれ小こ屋やの屋根やね北きた枝えだ又また普請ふしんよ懸くりて  
哥仙かせん材ま槌づちの祝儀あはれぎふおらび水みづ鷄けいうあ北  
枝えだ曇くもりとたれど卯うの花はなの時とき從より吾われ坂さか越こ  
る人ひとの笠かさきて杖つゑついで支し考こう 下略したりやく 或ある年とし

門人もんじん從より吾われ病床びやうぶとよ在あり日夜ひつやほどりた  
る友ともありとて枝えだをやみもふく訪まひ行ゆ  
き湯ゆ粥じゆくの世よ話わまでも為なたり々ら不ふ免めん角かく  
する中うち病やま篤あつくして治ち療りやう術じゆつ盡つきとりと聞き  
て更さらよゆらび吾われが命いのち終をえまると聞きあを  
て走はりゆき殯えん室むろよ入いて其その棺くわんを叩たたき  
從より吾われく我われを捨すてとばかり其その跡あと々ら大おほ聲こゑ  
よて泣ないどりさり扱さこそ此この程ほどうち絶た

とるは別わかに堪たう祿ろくたる故ゆゑなりと初はつは  
 譏こり輩しやうも寄よ合あて感かんじたりとるやは  
 まば平生へいぜいの交まじり思おもひををられたり  
 第十鯉こい屋や杉せん風ふうを江え戸ど北ひ人ひとその身み魚ぎよ家け  
 よして顔せき富ぶるといへども生涯しやうが耳みみ聾ろうの  
 憂うれありし兄あに仙せん風ふうと共ともに蕉せう門もんに遊あそぶ雀すず  
 歩ふと號ごうを挑ちやう灯てんの空そらに詮せんあり杜と宇ぎが  
 くりと抜ぬけ初はつふ齒はや秋あきの風かぜ薜あまや其その日ひく

の花はなの出で來き(此この暮くも又また操そううへり同おなじ事こと)  
 師し翁おう深ふか川がわに庵いんをむむべし頃ころ此この老ろう殊じゆよ  
 力ちからを盡つくせり一ひと年とせ翁おきなに送そう別べつの句くふ何なにと  
 ふく芝あし吹ふ風かぜも哀あはれ素そ堂どう去さを評ひやうし  
 て秋あきあるや冬ふゆあるや作さく者しやも志しらば只ただ  
 れもふ事ことの深ふかあらんといへり或ある書しよよ  
 師しの歿がつ後ご去さの人ひと支あ考こうと絶たつ交かうせるとし  
 記きを大おほなる証あかし言ごあり牧まき童どうう巢そ川がわ笛ふえ

集よ杉風より支考へ文書あり其詞よ  
いとく

愚事も早世上ふやのほしく口ふい  
づるも我と吟して我を慰むはかり  
よ候諸事御免可給候一兩年の中よ  
を追善の句を請申よて有べく候以  
の外病苦たもり候蚊のよねも達者  
よ見ゆる夏の中

翌享保十八年八十餘歳よして死せり  
是所謂蕉門の十哲といふは是あり是  
よ於て俳諧のを一へ大よ世の中よ行  
る事といなりぬ是皆芭蕉翁千辛萬苦  
精神心血を瀝し痕の遺りよなり

第七章

此章ハ桃青翁を論斥する者ハ非を  
辨明して翁の高徳を誣誤せざら



む

不知者言至歌道之宗師也  
古今翁其心事も辨知せざる者の言や  
ふ桃青翁家世々伊勢の國津の城主藤  
堂家お仕へて文武お練熟通達し武門  
よ恥ざる人物なり其職を奉り忠義を  
盡し主家代々の恩は酬ふるを當然と  
も然るに自ら恣お主君を見棄先祖已

來の家を打捨て雑髪して諸國よ巡廻  
行脚し丐兒の境界を學び主君への不  
忠祖先父母への不孝の罪おまじり大  
あるはなしく況や諸國諸郡の莊司里正  
お門よ彷徨經廻りて或は十日或は半  
月其門徒を聚て俳諧の筵席を開て外  
見よハ虚清風雅よ似たまども天下庶  
人お田畝よ耕し耘る本業を廢し花鳥

風月の遊あそびも酖おかしり多少おほくは光陰ひかりかげを費ひ糜びせ  
 しむるに於かへてをや其門人そのかど信徒しんたうも翁おきなのつひ顰ひび  
 も倣あやひて女の真似ま美女びよの顰眉まゆを醜江え湖こ  
 も遊歴あそびを專まかふ一本業ほんごうを捨すて浪遊らうゆうとる  
 遊民あそび俳道はいどうの行なも又隨まて益多えきおほし是こ  
 皆みな桃青翁とうせいおう之の備を作つくり一なり備を作  
 免まる形を古事ことといふ者ものあり此の文章ちやうのハ自みづか格か  
 りあ是こ芭蕉翁ばしやうおうの真ま實まことを知る人の論ろんもあ  
此の門人かどの自答こたへの格

らび設し蕉翁しやうおうも後世こうせいの迂濶うゑん放浪はうらうは俳諧はいかい  
 者もの流りゆうの如ごとくある所業しよごうあり一めむ稍道理どうり  
 も似にたる説せつといふべけれど如ごとく蕉しやう  
 翁おうの事跡じせきの實地じつちを知しりて世よの中なかは功こう  
 名な富貴ふきを脱だつ落らく抛た棄きして捨身すてみ決定けつぎして  
 千せん年來ねんらいの歌道かどうは衰頽すいたいたるを興起きうきする  
 の功こうを知らば實じつは我われが皇國かうこく神代しんたいの忠ちゆう  
 臣しん中興ちゆうきゆう歌道かどうの宗師そうしありとせむ但徒だんたも

本業を捨風流を主として座食浪遊を事  
として翁の本旨又達せず門人をして  
善道又誘導く事を知らざるものハ翁  
の罪人なるべし

第八章

此章は芭蕉翁の句の妙靈能く民庶  
の頑冥不靈を感化しその高足弟子  
及び其流を汲む名師宗匠往々天地

を動し人類を救ふの妙感あり後進  
の士是を標準として勉勵勤學を  
き事を述べて全局を結ぶ

蕉翁畢生以一句至其可不勉乎

芭蕉翁生涯の間よ一句の俳諧を以て

頑亮の小人を感化せし事一々擧まば

夥しき事あり彼口開て五臓を見せる

あぢびの那又道傍の木槿ハ馬よ噉ま

けり)の如き皆人々の輕薄多言を戒む  
 それが爲に感して言を慎み身を保  
 ちど尤人口ふ膾炙して後の世に傳へ  
 る其意味の深長ある哉感ん又(大哉春  
 大哉春と云云)の句に至りては天神化  
 育此靈徳を賛美し即萬物一體の仁を  
 咏出して餘る處なし躬は大道を悟得  
 るに非らざれば誰う之を能く言得む

其高足弟子即十哲の一人寶井其角の三圍  
 神社にて夕立てや田を三圍に神ふら  
 ば又信州にて狐の瓜畑を荒しける哉  
 村民の歎きまけまを己の名の片身を噉  
 む狐哉と書きて其畑に立其夜より狐  
 の出ざりし類又加賀の千代子の桑名  
 七里の渡の船中乗合は卒然瘧病を發  
 する者あり一船狼狽各々持合藥おど

投とどるるは更さらふ效きならず或ある人ひと有あり名なの千ち代よ  
 子こふる我われ知して一いつ句く之を救すむ事ことを乞こふ  
 聲こゑは應おひて唐たう土どの船ふねのねあまの落おち葉は  
 のぬ瘡きず忽たちち愈いたり又また東とう花はな坊ぼう支し考かう北ほく國こく  
 ふて同どう病びやうは罹かふものあり一いつ時とき恰あつも夏なつ  
 末ま秋あき初はつふ係けり々々乳にバ秋あき近ちかきたことと  
 あらハ落おち葉はのぬ瘡きず即すなはち愈いたりは類るい皆みな  
 天てん神しん地ち祇ぎ感かん應おう較かく著ちやう一いつきとの蓋け歌か道どうの  
い較かく著ちやう一いつきとの蓋け歌か道どうの

真ま髓ずいを得えて天てん地ち神しん明めいを感かんぜ一いつむる所ところ  
 以えふり嗟あ正せい風ふう俳はい門もんは從したが事ことはるもの其その  
 勉べん勵れいせざる可べきむや

俳教真訣畧解終

明治二十年三月二十日御届免許

今四月十日 刻成

定價二十七錢五厘

著述及藏版 大成教管長平山省齋

東京小石川原町四十四番

大成教教書發兌書林 北澤 伊八

浅草茅町三丁目  
五番地

